

(別紙 2)

論文審査の結果の要旨

氏名 みつのぶ 光延 しんや 真哉

本論文は、十八世紀半ばから幕末に至る江戸歌舞伎の特質を、金井三笑や四代目鶴屋南北の作品、また日替り興業（世話狂言を日替りで上演する興業形態）の作品を中心として明らかにしたものである。本書の構成は、巻頭に序章を置き、以下第一章「金井三笑と中興江戸歌舞伎」に「金井三笑の事績—中村座との関わりを中心に—」等の四篇、第二章「天明・寛政期の江戸歌舞伎の諸相」に「江戸歌舞伎における台帳出版—初代瀬川如臯作『けいせい優曾我』をめぐって—」等の二篇、第三章「四代目鶴屋南北の作品論」に『けいせい井堤』考』等の三篇、第四章「幕末・明治期の歌舞伎資料」に「西尾市岩瀬文庫所蔵『柳島浄瑠璃塚奇話』」等の二篇の論考を収め、末尾に終章を添える。

第一章は、近世中期を代表する狂言作者ながら、台帳がほとんど現存しないために研究が停滞していた金井三笑の伝記と作風についての論で、二度にわたる中村座乗っ取りの失敗による同座からの追放と復歸の経緯を関連資料の精査によって詳細に跡づけ、市村座時代の資料や、新発見の『卯しく存曾我』の台帳、また三笑に触れる周辺の洒落本・人情本等の戯作の検討から、三笑の作の特質が、「敵役」と「実方」の要素の混交、毒を含んだおかしみ、筋の一貫性とわかりやすさ等にあったことを明らかにする。

第二章は、日替り興業の作品を取り上げ、江戸では珍しい台帳出版の例である『けいせい優曾我』の出版事情を明らかにし、また『春世界艶麗曾我』の新出台帳の精密な分析からその推敲過程の具体相を探り、さらに本作に登場する「嶋のおかん」が、「悪婆」の役柄の嚆矢であるという新説を提示する。

第三章は、南北の作品論で、台帳の形で残る南北の最古の作『けいせい井堤』(立作者は金井三笑、南北は一部を執筆)を新たに紹介して師の三笑からの影響が強いことを論じ、またこれも新出の『曾我祭狭いさじく競』を丹念に検討し、一年間の興業全体に配慮した南北の作劇姿勢を指摘する。また、『四天王楓江戸粧』の「カタリ」(劇場の大名題の看板に書かれた、作品内容を示す七五調の美文)に注目し、実際に執筆された台帳と異なる当該作品の初期構想を明らかにする。

また第四章は、『柳島浄瑠璃塚奇話』を通して三代目桜田治助に対する当時の評判の一端を紹介し、また歌舞伎役者の墓に関する江戸から明治までの諸資料を精査して、役者研究にきわめて有益であることを説く。

従来の江戸歌舞伎研究は、近世後期の南北や幕末の黙阿弥の一部の作品の検討に偏り、黄金時代の一つとされながらも、南北以前の近世中期の作者や作品の考察がまだまだ不十分であった。本論文は、金井三笑の作品を多様な資料を用いて可能な限り詳細に考察し、また南北の作品に新出台帳等を駆使して新たに検討を加え、三笑が南北へ与えた影響の大きさを明らかにしつつ、近世中期の歌舞伎から後期の歌舞伎への繋がりを具体的に明らかにした点に、大きな意義がある。今後は、さらに南北の他の作や、音曲の方面からの考察などが望まれるが、近世中期・後期の歌舞伎の連続性を、多角的な視点と広い視野から捉えたことは高く評価できる。よって、本審査委員会は、本論文が博士(文学)の学位に相当するものと判断する。